# 歴史探訪クラブ 其の151

History Inquiry Club

文化財課 ☎23局3635
FAX 22局3811

## 懐かしい稲のはざかけ

すっかり秋の風がさわやかな季節になりました。やはり「食欲の秋」。秋のおいしい味覚とお米のご飯。今年取れたみずみずしい新米のご飯が待ち遠しいです。

さて、近ごろなくなった風景に、稲刈り、脱穀があります。この地域だと、夏休みの終わりから9月の初めに稲刈りが行われます。

私が子どものころ、夏の終わりの思い出といえば、ため込んだ宿題と稲刈りです。かつては、家族総出で田んぼに向かい稲刈りをしました。一帯で一斉に行われますので、田んぼのにぎやかなこと。そのころ、稲は鉄鎌で刈っていました。子どもたちは家族に刈り方のこつを教えてもらいますが、なかなかうまくできません。

また、田んぼにいるカエルやら虫などが気になって仕方ありません。そして、よそごとを始めてしまい、お手伝いにならないことも。けれど、今思えば、家族がそこに集うことが大事だったのかもしれません。

やがて、稲刈り機が登場し、作業は格段に効率よく進みます。子どもは束になった稲を集める役です。夏の終わりとはいえ、まだまだ暑く、汗にまみれてしまいます。稲の株や柔らかい地に足を取られ疲れも増します。そして昼休みに水風呂に入ります。

そのころ、稲を乾かすための「はざ」が作られます。昔は広い田んぼの稲を干すので、はざも立派です。はざ用の丸太は長屋の軒先に大事に保管されていました。二段の高さにもなると、男手がはざに乗り、集められた稲束を下から投げてもらいかけていきます。夫婦で息の合った作業は手際よいです。

脱穀は、家に運ばず田んぼで行う場合もあります。脱穀後の稲藁は、生活に必要なものすべてをまかなえるほど大事な材料で、時代が新しくなってくると、脱穀まで一気に行う機械が出てきます。現在では、粉砕され、そのまま田んぼに置かれる場合が多いです。

かつて稲の成長と、携わる人たちのかかわりによって、季節の移り変わりを感じていました。それだけにお米のおいしさ、ありがたさを感じていたかもしれません。刈り取った稲穂のずっしりとした重さ。そこに幸せを感じられました。現在では、大型の機械で一気に行うため、田んぼに人々の姿を見ることはなく、機械とそれを運ぶ車があるだけです。

このごろでは、稲のはざかけはめったに見ることはありません。あったとしても小さな区画や、山間の田んぼです。きっとその田んぼの人は稲を太陽と秋のさわやかな空気で乾燥させ、古代以来の手間をかけて「白米」にするのでしょう。

昔と今は違います。稲刈りも人間の工夫で省力化、さまざまな工夫がなされています。でも、ふと昔ながらの方法や大切さを思い出して見るのもいいかもしれません。

（増山）

▲はざかけされている稲（奥）と機械で粉砕されたわら（手前）

### 今月の「表紙」

▼日本一の農業産出額を誇る田原市には、野菜をはじめ、おいしい食べ物がたくさんあります。その利点を生かして、今年の田原市は、「6次産業化」や「野菜ソムリエ」に関する事業が予定されており、どちらも地域の「宝」を生かすもの。子どもたちには、地元の安心安全な食材を味わいながら、すくすく元気に育ってもらいたいですね。（M）

【表紙の写真】楽しい給食の時間（神戸小学校）

広報たはら Tahara
No.748 平成25年10月15日号
●編集・発行／田原市役所政策推進部広報秘書課
●電話／0531-22-1111（代表）
●Eメール／koho@city.tahara.aichi.jp

本誌は再生紙を使用しています。